

My personal view is that many Chief Executives are not objective.

個人的には、多くのCEOが客観的でないと思うんですね。

Chief Executives CEO(Chief Executive Officer) 企業の最高執行責任者

This is part of this business of the executives who's got... has a dream. Sometimes a dream is a good thing, because if you never have a dream, you know, you never progress. So I'm not saying dreams are bad things, but dreams that you can't implement or that you don't know how to implement are of no good to anybody.

これは、夢のあるエグゼクティブの方たちで気になることのひとつですね。時によっては夢というのはよいものです。というのも、夢がまったく無ければ、まあ、進歩はないですから。ですから、夢が悪いことだと言っているわけではありません。でも、実行できない夢や、どう実行してよいか分からない夢は、誰のためにもなりません。

this business of... ...の点で気になる、...の点で問題だと感じている、...の点で意見がある

**慣用表現**

business の面白い使い方、日本語になりにくいのですが、this business of ... で自分が気になっていたり、問題だと思っているなど、なにか一家言ある問題について「～の問題」といった感じで言うときに使われます。したがって、後ろには、そのことについてその人の意見などが続くことが多いです。同じ使い方、What's this business of [about] ... 「～って、いったいどういうこと？」という言い方もよく聞きます。これも、何かしら、懸念や意見や非難などがあって聞いている感じです。

the executives who have a dream 夢のあるエグゼクティブ

**パターン表現**

the executives とシンプルな名詞でまず置いて、後ろから「どんなthe executives なのか」を節で詳しく説明してくれるかたちです。この「名詞 (the executives) + 修飾節」のかたちは非常によく出てきます。日本語の語順だと「夢のあるエグゼクティブ」と修飾部分が名詞の前にくるため、聞き取りで混乱しやすいかたちでもあります。the executives ... とシンプルな名詞がきたら、「後ろから詳しく言ってくれそうぞ...」という意識で、「OK、どんなエグゼクティブ？」と後ろから足されてくる情報を楽しみに待つように、慣れておきましょう。

sometimes, (確かに) 時によっては (...ということもあります)

**ロジック**

「夢のあるエグゼクティブについて、まさにこれが(客観性のなさ)気になる点だ」という直前のメインポイントに対して、この sometimes からが<挿入>になっています。「夢があることは場合によってはよいことだ」と自分のメインポイントの逆の側面についても認識していることを言って、「夢があること自体を否定しているのではない」と誤解を解消している<挿入>です。このように、Sometimes は、メインポイントとして述べたことが「必ずしも当てはまらないケースや場合」についても認識していることを示して、「確かに～な場合もあるでしょう」、「確かに～ということもあるでしょう」と、相手の反論や誤解を解消するときによく使われます。

ただ、sometimes は、こうした<挿入>のときだけではなく、単に「例えば、時に、こういうことがある」、「例えば、ときに、よく目にするのは...」と具体例を挙げるときにも使われます。従って、sometimes ... と聞こえてきたら、1)自分のメインポイントの逆側面に対する理解を示して反論や誤解を解消するための<挿入>なのか 2)純粋な「サポート」なのか、その両方の可能性を頭に置いて、先をよく聞き進みます。また、後ろに、メインポイントに戻る but がこないかどうかにもよく注意して聞き進みます。両方の可能性を頭に置いて聞くことで、論旨を見失いにくくなりますね。

ここは、**So, I am not saying** dreams are bad things 「夢を持つことが悪いと言ってるんじゃないですよ」と、直後の文で非常に明確に「誤解を解消するための表現」が使われており、かつ、その後ろで **but ...**ときていますので、Sometimes 以下が挿入部分であることが押さえやすいですね。

if you ..., you ~ もし...しなければ、~になってしまう

**ロジック**

if...(メインポイントを否定する内容), you ~ (マイナスの内容) 「もし...しなければ、~になってしまう」とマイナス点を説明して自分の主張をサポートするときによく使われる表現です。ここは「夢を持つことはいいことでもある」のサポートとして、「夢がまったくないと、何の進歩もしない」とマイナス点で説得しています。同じ文のかたちが利点を売り込むときにも使え、if...(メインポイントを肯定する内容), you ~ (プラスの内容) 「もし...すれば、~ができる、~になる」のようになります。

I'm not saying ... ...と言っているわけではありません

**ロジック**

Sometimes, ...以下<挿入>部分を、I'm not saying ...で最後にまとめています。I am not saying... は、誤解を避ける内容を言うときによく使われる表現です。I am not saying that...と聞こえてきたら、「×！(こうじゃないよ)」と×印を頭にしっかりとこすりつけて後ろを待つと、文頭から意味がずっと入ってきやすくなります。

この言い方は、「×！(こうではなくて...) ! (こうなんです)」とセットで使われることもよくあります。このとき、「旗印」表現もセットになって使われることがよくありますので、セットで慣れておきましょう。

I am not saying (that...) 「×！(こうではなくて...)」

but I am saying (that...) 「！(そうではなく、こうだと言ってるんです)」

how to implement 実行の仕方

**慣用表現**

implement は、「計画、約束、ルール」といった机上のものを、現実には「実行する、実施する」という意味です。

**パターン表現**

[ how to... ] で、「...の仕方」という名詞句にするこの言い方は、よく使われます。「...の仕方」、「...のやり方」、「...の方法」と一単語感覚で理解したり、使ったりできるように慣れておきましょう。聞き取り、スピーキングの両方で大きなプラスになります。

how to conduct an effective meeting 上手な会議の運営方法

how to manage conflicts among employees 社員間の争いの対処法

of no good to anybody 誰のためにもならない

**慣用表現**

慣用的な表現で、否定形で使われるのが一般的です。「誰にとっても、よさ、価値、有用性をもたない」といった意味で、「誰にも役に立たない、プラスにならない」ということです。good のところが use (有用性) になって使われることも多いです。

So I think you do have to stand on the ground.

ですから、ぜったいに地に足をつけていなければいけないと思います。

to stand on the ground 地に足をつける

**慣用表現**

the ground は「現実、現場」の意味で、「現実、現場に身を置かねばならない」ということから、「現実を見て、地に足をつけている」という意味合いでも使われます。

And if you are going to have a purpose going forward, then you have to work out how you can do it.

It's no good having the purpose without the foundation.

で、前に向かって進むうえで目的を持つというのであれば、ならば、それを実現できる方法を考え出さねばなりません。目的を持っていても土台がなければ意味がありません。

if you are going to ... ...するつもりなら

**パターン構文**

現在進行形のコアは、「ルールが敷かれていて、そのルールの上に乗って進んでいる」感じですから、通常、「~するつもり、~する予定」などの意味で使われるわけですが、ここはもうひとつのニュアンスとして、「...するつもりがあるなら」という響きの使い方です。

...going forward 前に進む上で...

**パターン表現**

if you are going to have a purpose に、「~する時に」、「~するにあたって」のような意味で、-ing 形で情報を足すかたちです (文法書などで「分詞構文」と言われている使い方です)。このように -ing

形 (分詞構文) で情報が足される場合、主節部分 You are going to have a purpose と「同時並行で起こっている」というのがコアの感覚です。そこからコンテキストによって、「～するときに (時)」、「～なので (理由)」、「～しながら (付帯)」のように理解するといいいですね。

to work out ... ... を考え出す

**慣用表現**

to work out ...は、「...」の部分に、work する(取り組む、工夫する、考える)ことで出そうとしている「結果・答え」がきます。to work (工夫する) + out (出す) で、「何かに対して工夫をして取り組み、ねらっていた結果や答えを出す」という意味になります。

to work out a solution 解決策を見出す

how you can do it それをできるようにする方法、それを実現する方法

**パターン構文**

[ how S + V ] の名詞のかたまりです。直訳的には、「どのようにしてあなたがそれをできるか、そのやり方」ということですが、意味としては「それをできるようにする方法」、「それを実現する方法」のように、一単語感覚でとらえます。[ how S + V ] の名詞のかたまりは、よく使われますので、「～のやり方」、「～の方法」と一単語感覚でとらえられるように慣れておきましょう。

how we can do our business どうやってビジネスを行うか 仕事の仕方、ビジネスのやり方

how this system works どのようにシステムが機能するのか システムの仕組み、動かし方

how things are going いろいろなことがどのように進んでいるか 現状、状況

it's no good ... ...は意味がない

**やまと言葉**

good は「よさ、価値、有用性がある状態」の意味です。「...は価値がない、意味がない」の意味になります。

**ロジック**

前に述べた「目的を持ち、かつ、それを実現する方法を見つけなければならない」について、それをしない場合のマイナス点(=「意味がない」)を説明することでサポートしています。

the purpose without foundation 土台のない目的

**パターン表現**

このように「名詞 without ...」、「名詞 with ...」で、その名詞が「どのようなものなのか」という「特徴や性質」を言ってしまう、便利な表現です。

So I do think that's terribly important.

ですから、それはとても大事なことだと思います。

I do thing that's ... で、それって...だと思っんですよ。

**やまと言葉**

So I think...のところに、強調の do が入っていますから、「やはり、絶対～だと思っ、とって～だと思っ」と信念の強さが伝わってくる感じですよ。

**パターン構文**

それまでに話してきたこと、あるいは、直前に述べたことを that で受けて、「で、それって...だ」と話すパターンです。